地域の飲食・観光・娯楽文化を問い直す

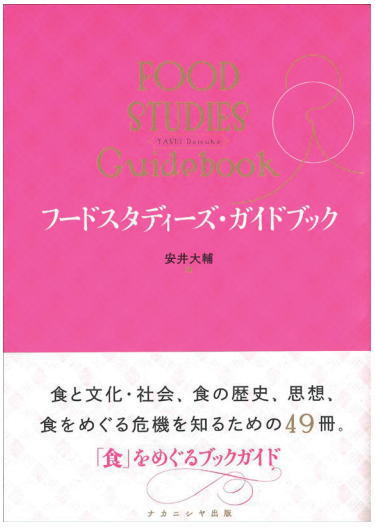
関連するSDGsの国際目標

人間文化学部　地域文化学科　　准教授　　櫻井　悟史
研究分野　：歴史社会学、文化社会学、犯罪社会学

概要：COVID-19の影響で、飲食・観光・娯楽文化が深刻な打撃を被りました。こうした現状をふまえ、それらの文化の過去・現在・未来を問い直し、持続可能な実践を支える基盤を整えることが求められていると考えています。

■飲食文化の問い直し

私はこれまで、飲食と場所の関係について考えてきました。具体的には、右に挙げた『フードスタディーズ・ガイドブック』の中で、都市社会学者であるレイ・オルデンバーグの著書『サードプレイス』を取り上げ、「コミュニティの核になるとびきり居心地よい場所」とは何かについて検討しました。また、日本の戦後文化を研究しているマイク・モラスキーの『日本の居酒屋文化』を取り上げ、地元に根付いた庶民的な、主として個人経営のこぢんまりした居酒屋＝〈赤提灯〉が、いかに地域の「サードプレイス」として重要かということについて検討しました。こうした研究を活かして、滋賀県の飲食文化と地域の居場所との関係について問い直したいと考えています。



安井大輔編『フードスタディーズ・ガイドブック』(2019年、ナカニシヤ出版)の表紙。私はこの本の中で、ノルベルト・エリアス、レイ・オルデンバーグ、マイク・モラスキーという三名の社会学者を紹介しました。

■観光文化の問い直し

COVID-19によって、観光業は大きな変化を余儀なくされました。私の研究室に所属する大学院生が、中国のクラウドツーリズム（遠隔観光）について研究していますが、日本でもバーチャルな観光が現れはじめています。これまで、観光には人の物理的移動が欠かせないと考えられてきました。その前提が、新しい観光形態の登場によって、いま大きく揺らいでいるのです。しかし、そうしたバーチャルな観光形態は、旅行番組を見ることとどう異なるのでしょうか。地域や文化遺産を紹介する映像を見ることと何が違うのでしょうか。バーチャルな観光が可能であれば、現実の地域はなくてもよいのでしょうか。観光とは一体何か、観光にとって物理的な身体移動はいかなる意味をもつのか。こうしたことについて考えることが喫緊の課題となっています。私は、これらのことについて、滋賀県の観光文化を手がかりに考察したいと考えています。

■娯楽文化の問い直し

COVID-19は、様々な娯楽文化にも影響を与えました。私はこれまでサントリー文化財団の助成を受けて、大阪のキャバレー文化について研究を進めてきましたが、初期の自粛要請で真っ先に槍玉にあげられたのがキャバレーでした。キャバレーはカフェーの系譜に位置付けられる娯楽産業です。現在、キャバレーはほとんどなくなってしまいましたが（全てなくなったわけではありません）、キャバレーに備わっていた娯楽文化は、様々なところに見出せます。たとえば、クラブの踊り、カラオケの歌、スナックの社交などです。私は現在、キャバレーを軸として、日本の娯楽文化を捉え直す歴史を書くことができないかと模索しています。そうした作業は、これまでも日本文化の新たな側面に光を当てる研究として重要であったと考えますが、このような時代において、一層重要性が増したのではないかと思われます。娯楽文化とは何かを根本から問い直し、そうした文化を擁護するための基盤を整えること。それがいま必要なのではないかと考えています。